

異質の共棲空間

長坂有希「カムイワッカへ、そして私たちの始まりへ」

モルタル打ちっ放しの展示空間に足を踏み入れると、錆が目立つ鉄板を貼ったテーブルが佇み、その上には緑色の水で満たされたフラスコと黄色い石ころがスポットライトを浴びていた。その奥の壁面には凍てつく大地の映像。そして英語のナレーション。おそらくこの空間に足を踏み入れたほぼ全ての人が、強烈なメッセージ性を感じながらもその意味を捉えきれず、焦点を当てる場所を探しあぐねて展示室を彷徨ったことであろう。私もテーブルの周りをぐるぐるとめぐりながら長坂の狙いを探し続けた。2、3分ほどした頃だろうか、突如ナレーションが途切れ、わずかな静寂の後、長坂の声はアンガスという名の人物に向かって話し始めた。それは私に語りかけているようでもあり、しばらくそのモノローグに聞き入っていると徐々に展示の意図が見えてきた。それが通釈になっているかわからないが、作品の背景にある北海道に暮らす住人として、また地質学者として、私の目にこの作品がどのように映ったのかをここに記してみたい。

壁面に投影された映像に映っていたのは3月の北海道。しかも凍てつく道東の冬景色。長坂はそんな知床半島に分け入った。長坂が目指したのはカムイワッカの滝。強酸性の温泉が流れ落ちる滝として知られるが、冬になると道が雪で閉ざされる。長坂はその雪道を踏破して滝にたどり着き、翌早朝に滝を目にしたところで映像は終わる。これだけではただの探検映像のようであるが、映像のほとんどを占めるのは知床半島の雪景色ではなく、横長の閃光が走る濃紺色の背景であった。一見、川のようにも見えるが、きらめく光点が夜空や宇宙を感じさせる。また、映像には日本語の字幕が付されていたが、字幕の内容は英語のナレーションと同期しておらず、目と

耳から届く情報の乖離が時の流れを印象づける。これは時空間を表現する仕掛けなのだとか次第に意識し始めた頃、長坂は地球や生物の歴史をアンガスに問いかける。ああなるほど、私たちがどこから来たのかを伝えたいのだなと思わず得心してしまいそうになるがそれは早計である。長坂はその上にさらに何層ものメッセージを被せているようであった。

視線をテーブルに戻すと、やはりフラスコと石ころが目に残る。映像を見た後だとフラスコの中にある水はカムイワッカの滝から汲んできたものだろうと想像できる。この水の中にはイデユコゴメという藻類が生きている。では石ころは何だろうか。これはストロマトライトと呼ばれる化石で、約30億年前の海に出現し、現在も繁栄しているシアノバクテリアという藻類が作ったものである。このシアノバクテリアは大気中の酸素を増大させた生物だと言われる。つまり、フラスコも石ころも藻類であるが、一方は現世界を作り出したシアノバクテリアであり、他方は世界の片隅でひっそりと息衝くイデユコゴメ。そして両者をつなぐ錆びた鉄板の掛け橋。この配置の妙に気付いた瞬間、この展示室に漂っていた強烈なメッセージ性の謎が氷解した。

時を遡ること約30億年。その当時の海水中に出現したシアノバクテリアは光合成を開始し、海水中に酸素イオンを放出し始めた。しばらくは海水中の鉄イオンが酸素を取り込み、海水中の酸素濃度を制御していたが、鉄イオンが水酸化鉄として沈殿しきってしまうと海水中の酸素濃度は急増し、酸素はついに大気へと放出されていた。それまでの地球では無酸素状態を好む嫌気性細菌が栄華を誇っていたが、この酸素濃度急増という大気汚染を機に、これまで無聊を託っていた好気性細菌に出番が巡り生息域を拡大していった。その後も大気中の酸素は増加を続け、人類など大きな身体を持つ動物の出現を可能にした。

つまり、シアノバクテリアは現在の地球表層環境を作り上げた開拓者であり、一方、イデユコゴメは、現代では限られた環境でしか

棲息できない儂い存在である。しかし、この展示空間においてはシアノバクテリアは死んでおり、イデユコゴメは生きている。この逆説的配置にもメッセージが込められているのであろう。私たち人類はこの地球を開拓し尽くし、支配しているかのように錯覚することがある。しかし、宇宙や地球の壮大な時空間スケールに照らし合わせると、それは長坂の映像に流れる閃光のように一瞬の共棲に過ぎず、何かを作り上げたかのものであっても刹那に消え去るものなのかもしれない。この示唆は、ナレーションに出てくるスノーボールアースによって裏打ちされる。スノーボールアースとは地表が雪氷で覆い尽くされた時代や現象のことで、地球史上少なくとも3回起こったことが知られており、その都度多くの生物種が絶滅した。しかし、生物が根絶されることはなかった。それは温泉があったからだと考えられている。地表が雪氷に覆い尽くされても、火山地帯だけはその熱によって雪氷を溶かし、オアシスのような温泉に太陽の光を集め、生命の灯火を継承するノアの箱船として機能させたにちがない。そしてその当時、イデユコゴメのような強酸性熱水に耐えられる生物こそが強者であり、次代の生物を生み出す母として地球の片隅で生命を守り抜いたのであろう。

ふとテーブルの下を覗き込むとヒーターが見えた。これはフラスコの中を温かく保つための仕掛けであろう。イデユコゴメの生命維持装置とも言える。もしこのヒーターが壊れたらこのフラスコの中のイデユコゴメはすぐに死滅してしまうにちがない。こんなか弱く見えるイデユコゴメでも、ほとんどの生物が死に絶えた時代には適応し、現代に生命をつないでくれた。もし当時の生物にこのような存在を許容する多様性がなかったら、現代の生物は生まれていないであろう。そして現代の生物に多様性がなかったら、いつかまた必ず訪れる危機を乗り越えることはできないであろう。なるほど。長坂は現代社会の受容性の乏しさへ警鐘を鳴らしているのだろうか。私は大学の教員でもあるため大学生の均質さを感じることが多い。その主因は明らかで、暗記力を主眼に置いたテストによって入学可否をふるい分けているため、受験システムにうまく順応できる性格

を有した学生が大学に濃集されることになる。そしてその多くは新たな課題を発掘して解決する能力よりも、過去の事例を暗記する技術を磨き続けてきたため、変遷する社会から取り残されていくことになるかもしれない。あちこちで持続発展可能な社会の構築が盛んに叫ばれているが、この作品が明示するように持続する環境などこの地球上には存在し得ない。移ろいゆく世界に順応し、危機を克服していくには、多様な価値観を有する社会を作る努力が必要であろう。

長坂は、異質なものが完全に混ざり合うことなく共生する環境の重要性を発信している。深読みし過ぎているかもしれないが、長坂が展示の舞台に北海道を選んだのも共生社会のモデルとして相応しいと感じたからではないだろうか。この北海道の大地には古くからアイヌ民族が独自の文化を展開してきた。私はアイヌ文化を深く理解しているとは思っていないが、アイヌ民族の血を引く人々と接するうちに、自然と共生する生き方を大切にすることを知った。それとは対照的に、後に移住してきた内地の人々は自然を変容させる開拓に励み、その結果、自然と共生する文化の場は縮小していった。長坂の作品を眺めていると、アイヌ文化がイデユコゴメのように見えてくる。この現代社会では縮小を余儀なくされているが、いつかまた環境が変移すると自然と共生する生活様式に揺り戻されていくのかもしれない。いや、人為的な擾乱を遥かに凌ぐ環境変動や社会問題に追われる昨今を鑑みれば、現代のマジョリティーが衰退する時期が訪れつつあるのかもしれない。そしてまた新たに私たちが始まるのだろうか。

山本順司

cality of old specimen labels, which evoke the feelings of history in us. By having Nagasaka's work, which will be re-configured to fit into the exhibition, in the middle of the exhibition space, I hope to sensuously convey the profoundness of algae to the audiences and make an intriguing exhibition by the synergetic effect created by art and science.

Tsuyoshi Abe

服部 浩之

インディペンデント・キュレーター

1978年生まれ。早稲田大学大学院修了（建築学）。青森公立大学国際芸術センター青森[ACAC]学芸員を経て、2017年より秋田公立美術大学大学院准教授。アジア圏を中心に、展覧会やプロジェクト、リサーチ活動を展開。近年は、「十和田奥入瀬芸術祭-SURVIVE：この惑星の、時間旅行へ」（十和田市現代美術館、奥入瀬エリア | 2013年）、「Media/Art Kitchen」（ジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、バンコク、青森 | 2013年-2014年）、「あいちトリエンナーレ2016—虹のキャラバンサライ」（愛知県美術館ほか | 2016年）、「ESCAPE from the SEA」（マレーシア国立美術館、Art Printing Works | 2017年）、「近くへの遠回り」（ウィフレド・ラム現代美術センター | 2018年）などの企画に関わる。第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」（2019年）キュレーター。

山本 順司

地球科学・教育学・博物館学

1973年滋賀県生まれ。2001年東京大学大学院修了（博士[理学]）。地球を時空的に解剖することを旨とした「四次元地球プロジェクト」を推進。
2003年京都大学大学院理学研究科助教に着任。宇宙と地球の接点である太陽系の形成過程を探るため「石の中の銀河プロジェクト」を推進。地球深部に眠っている地球形成初期からの残存物質の探索に没頭。
2011年の東日本大震災を機に教育普及活動の重要性を痛感し、教育学や博物館学を志向。
2012年北海道大学総合博物館准教授に着任。「地球体感教材開発プロジェクト」を開始。開発した教材を次々に科学イベントや授業に投入し、その効能を教育系学会誌や博物館学系学会誌で公表することで、科学リテラシーの底上げに力を尽くしている。
2015年から社会と学術界が交わる場を作ることを目指し、大学博物館を知的ハブとする「知の交差点プロジェクト」を開始。
誰もが意識せずに立ち寄れる究極のユニバーサルミュージアムを作ることを目指して活動中。北海道大学准教授。

阿部 剛史

藻類学

1968年東京都生まれ（幼時に埼玉県に転居）。1998年北海道大学大学院修了（博士[理学]）。紅藻ソゾ属を材料に、従来の分類学的手法に加え、培養株を用いた交雑実験と化学分類を併用し、日本近海における種内分化過程を推定。
1998年北海道大学大学院理学研究科助手に着任。北海道大学総合博物館の設立に関わる。
1999年北海道大学総合博物館の発足に伴い、同、博物館情報メディア研究系助手に移籍。
2000年日本藻類学会論文賞受賞。
2006年ほぼ40年ぶりとなる知床沿岸の海藻相調査に参加、以後、知床世界自然遺産浅海域生物相モニタリング調査に海藻担当として参画。
2012年夏季企画展示「藻類が人類の未来を救う」担当。
2012年北海道大学総合博物館資料基礎研究系講師に昇任。
2013年タイ国立科学博物館出張展示「Algae for Humankind」担当。
2019年北海道大学総合博物館資料基礎研究系准教授に昇任。